

第 73 回講演会〈2024 年 10 月 3 日開催〉

中国における外国人コミュニティの形成と変容

周 雯婷 (執筆=叶 尤奇)

■ 講演者……周 雯婷

(広州大学 マネジメント学部 准教授)

■ 司 会……叶 尤奇 (本学外国語学部国際コミュニケーション学科 准教授)

本講演では、周先生は、地理学的視点から中国における日本人および韓国人の集住地域の変容と発展について紹介した。また、彼・彼女らの集住エリアにおける空間的配置がエスニック・コミュニティの形成や発展にどのような影響を与えているかについても説明した。

まず、日本人集住地域の事例として、上海市が取り上げられた。上海に在住する日本人は、企業派遣の駐在員とその家族、日本人向けにサービスや小売業を展開する現地起業者、現地で採用された従業員という 3 つの類型に分類することができる。これらの集住地は長寧区や閔行区に集中し、日本人向けの生活関連施設が数多く存在していることが報告された。日本人は同じエリアに集住する背景には、安全性の確保や日本の生活様式の維持、子供の教育環境の整備などが関わっていると説明された。

一方、北京の韓国人集住地域についても説明された。韓国人の多くは、北京市朝陽区の望京エリアに集住しており、主に政府関係者や韓国

企業の駐在員、起業家、留学生などから構成されていると紹介された。望京エリアでは、韓国人向けの飲食店や不動産業が発展し、エスニックビジネスも活発に展開されていると説明された。こうした集住の背景には、経済的な動機や文化的・地理的近接性、教育資源の充実が影響していると指摘された。

さらに、エスニック資源の活用と観光化の側面については、蘇州市および上海市における具体例が取り上げられた。蘇州の淮海街では、1990 年代以降、日本料理店や日本式バーが集まり観光地化が進展したが、2010 年代には東南アジアへの日系企業の移転により日本人街が衰退を見せたと説明された。こうした地域においては、多文化共生を目的とした景観整備や都市再開発が行われ、観光資源としての可能性も模索されていると指摘された。

これらの調査結果から、中国におけるエスニック文化の観光資源化や多文化共生の推進が、今後の重要な課題であると説明された。特に、地域の国際化やエスニック・ツーリズムの展開可能性に対してさらなる検討が必要であり、集住地域の変容が地域の持続可能な発展に及ぼす影響について理解を深めることが今後の都市計画や地域振興の重要な指針となると指摘された。

質問応答

上述の講演内容を受けて、学生からは「韓国人のフリーターはなぜ北京に住んでいるか」、「日本人と韓国人は上海と上海の特定のエリアに集住する理由は何か」、「借り傘戦略の定義とは何か」、「韓国人向けの経営者は誰なのか」など、様々な質問が寄せられた。また、周先生と学生たちは、日本での外国人コミュニティに関するイメージやオーバーツーリズムについて活発な議論を重ねていた。



周 雯婷 氏